

「いじめ」その克服の

手掛かりを求めて

深谷和子氏(東京学芸大学助教授)

五十八年十二月、私はいじめの調査を手掛け、その数字に驚き、もうこの問題は放置できないと感じました。

ただし、気をつけなければならぬのは、人間関係のすべてのトラブルをいじめということとらえてはいけません。特に、けんかといじめの区別をつけることが、教育現場で非常に大切なことです。けんかは、子供が成長発達する上で、ぜひ体験した方がよいからです。

その見極めの手掛かりとして、①お互いの力のバランス②継続する期間③何らかの過失があるかの三点があると思います。

いじめられる理由として、なんとなく生意気、かんにさわるかか挙げられますが、だからもそう思われたいようにすることは大変なことです。みんなからよく思われ、味方だけを持つことは不可能です。これが、いじめの標的さなんです。いつ、いじめの標的

にされるかわかりません。

自分と違う特徴を持った子供がいると、まるで自分と同じ種類の人間ではないかのように異端視する。それがいじめのメカニズムではないかと思えます。子供たちにもっと、自分と違った他人を許せるようなメンタリティが広がれば、仲間を排除するような傾向は起こってこないでしょう。

では、これほど問題になっていまいじめを、なぜ子供たちはやめないのでしょうか。

その一つは、いじめられる側にも原因があると、子供たちにいじめを正当化する気持ちがあること

です。この誤りをきちんと正していかなければなりません。

しかし、これだけではそれほどいじめは長続きはしません。それを支える二番目の大きな条件として、おもしろさがあります。いじめは、子供たちにとってはおもしろいゲームなんです。

今の子供たちは、一人一人が孤立しているというイメージがありますが、競争社会の中でやはり仲間といっしょに楽しみたいという気持ちを強く持っています。子供たちが執ようにいじめを続けるのは、おもしろさだけでなく、仲間と気持ちをそろえて、何か一つの

目標に向かってやり続ける楽しみがあるんだろうと思います。

そういうことを考えると、いじめを生み出している状況は、子供が置かれている今の状況を非常によく反映しています。学校がもっと充足感を持てるすばらしい場であれば、いじめはこれほど広がらなかつたのではないのでしょうか。

大事なことは、学校を子供たちの天国にすることかも知れませんね。

それでは、実際いじめが起きたときはどう対応したらよいのか。いじめに関して、親ができることは非常に限られています。まず一つは、必ず担任へ相談することです。相手の親へ苦情とか、直接行動はしない方がよいと思います。また、勇気を出して戦えと言うのも無理です。

先生に相談する以外にもう一つ、親でなければできないことは、いじめられている子を完全に支えてやることです。百習子供の味方になることです。どんなことがあっても、私はあなたの味方なんだということ、子供に聞かせてください。もし、お母さんがしかつたなら「自分が弱くてためだから、いじめられているんだと思ってい」と、理解するでしょう。そのとき、お母さんはもう味方ではないんです。



そして、両親のほかにもう一人の味方が担任の先生です。両親と先生が支えてやることであれば、いじめ戦争は長くは続かないと思います。しかし、担任として、クラス全体の中で指導力を発揮し、いじめを集団の力学で解消していく手だてを講じるためには、ある程度の時間も必要です。

いじめに速効薬はありません。子供が支えられ、少しでも強くなっていく期間に、担任の先生はクラスの子供たちがどうしたらいいか以外のおもしろいゲームに、気持ちを転換させることができるか。自分の仲間と違う資質を持った人を、排除するような誤った態度を正していくかを考えていかなければなりません。

先生は、教育の専門家として、母親以上に子供を支える必要性和、その力を持つてはるはずで、そういうことを考えると、私たちはいじめ問題解決の大きなかぎを持っていると言えそうです。